

# 山と博物館

第39巻 第2号 1994年2月25日

大町山岳博物館



松本市からの乗鞍岳と月 写真と文 岩佐浩幸

「今宵、君も、同じ月ヲ見テタライネ。」  
北アルプスに魅せられて、松本に住み着いて三年が経ちました。

以前は山小屋従業員の仲間達と共同で一軒屋に住んでいましたが、最近では松本市の郊外の常念岳を望める場所にアパートを借りています。気象条件の良い日には早速カメラを持ち出して撮影をします。買ったばかりの五〇〇ミリレンズに二倍のテレコンバーターを付けると山はもちろん、月などはまるで天体望遠鏡を見るように大きく撮れます。私の友人に、ふだんは住み込みで働き、そうでないときは旅行するという女性がいます。彼女とは北アルプスを登山中に行き会いまして、共にその頃山小屋従業員でしたせいか気が合います。同時に休暇を取って後立山を縦走をしたりもしました。

さて、昨年の冬、彼女は乗鞍岳のスキー場で例によって住み込みで働いていました。私のアパートからは乗鞍岳も望めますので、彼女の頭の上のお天道様の様子もわかります。電話で

「今日は久し振りに晴れたね。」  
と言え

「霧氷が付いてたよ。」  
などという返事が返って来ます。

こんな会話をした事もあります。

「今日夕焼け見た。」

「見た見た。あたしや思わず三十分くらい立ちすくんで見てたね。」

「夕焼けも良かったけど月が……。」

「そう。三日月が出てさあ。」

「その三日月が細くて。」

「そうなの。細くってきれいだったの。」

今、彼女は(たぶん)旅行中です。旅先から連絡をくれるような性格では無いので、実際には今何処に居るのかまるで把握できません。まあ、彼女の身の上は何事も無ければ、同じ空の下で元気に歩き回っている事でしよう。

今宵君も、同じ月を見てたらいいな……。

# 雨飾山の小型哺乳類を調査して

肴 倉 孝 明



ニイガタヤチネズミ

あ、ハコネサンショウウオの幼生だ、小谷温泉の上、鎌池近くの入山口からほんの少し歩くと湿原が展開している。時は八月、ここ何日かの晦となるテントを設営して、湿原に流れ込んでいる溪流に水をくみに行つたところ、いるわいるわ。何やら皆して嬉しくなつてしまった。このようにして始まつた雨飾山の小型哺乳類調査。ネズミを求めて、日本各地の自然の中を歩いていても、初めての山に入るときはいつもわくわくする。どんな自然と会えるのだろうか。どんな動物が棲ん

でいるのだろうか。場所によっては予想以上に人の手が入っていたり、荒れ放題であつたり、胸が痛くなることも多いが、これならば出だしは上々である。さつそく作戦会議。地図を見ながら標高ごとにトラップを仕掛ければ、雨飾山の小型哺乳類相がわかるだろうということになる。

翌日、生け捕り用のトラップを背負つて出発。湿原のなかは、暖かい水たまりにはヤマアカガエルと思われるオタマジャクシが群れていた。その脇の冷たい流れにはヤマメやイワナが人も恐れず泳いでいたり、見えて飽きない。登りにかかり少し行くとブナ林になる。標高一三〇〇m、ここを最初のトラッピング地点とする。林床はササだが、よくみるとブナの太さが揃っている、というより揃いすぎている。雪崩が起きるような地形でもなし、はあ、薪炭に使つていたな。皆伐せず間伐でうまく使えば自然は残るよい見本のようなもの。また気分をよくしてトラップを仕掛けにかかる。深いササのなかに分け入り、落ち葉の下にあるネズミの坑道を探し、一つずつ丁寧に歩いて行く。ここに百台。道は一度降って雪の詰まった沢を越える。標高一五〇〇m地点、環境的には一三〇〇m地点とあまり変わりはないが、ブナが少し小さくなる。そこにやはり百台を仕掛けて本日は終了。下山して大漁祈願?の酒を酌み交わす。明日からは忙しい。

早朝四時半、トラップの回収に出かける。遅くたって日が登るとせつかく取れた獲物の状態が悪くなつてしまつたり、腐つてしまつたりするからの早立ちだ。何がとれているのか、足よりも軽くなる。一汗かいた標高二三〇〇m地点、アカネズミが十個体とヒメネズミが十五個体とれていた。捕獲率は二十五%、かなり良い方、というより良好なブナ林ならば普通の数字か。一五〇〇m地点、アカネズミが五個体とヒメネズミが六個体捕獲されていた。足早に下山して、朝食を取つた後、各部位の計測と解剖を行う。標本にするためにはきちんとしたデータを残さなくてはならない。

ある程度捕獲個体の処理が終わつたところで、足の早いものが山頂に向かうことにする。前日のトラッピングサイトを過ぎるとそこは未知の道。一度降ると雪渓の残つた沢に出る。ここからは木も顕著に小さくなり、環境が大きく変化する。急登だ。上り詰るとと視界が開ける。広いササ原で、山頂の部分だけが遠くにはぼんと盛り上がりが見える。山頂にたどりつくと、その周囲だけハイマツが認められる。さすがに長野県にあつても北部に位置する山、北アルプスの主稜線では標高二三〇〇から二四〇〇mにならないと現れないハイマツが二〇〇〇mを切つて(山頂の標高は一九六三m)分布している。

天候が悪化し、ガスがかかつてきたので、見物もそこそこトラップを仕掛ける。山頂部は狭いので、その下のササ原に、四人が好きなところを選んで二百六十三台を設置した。ササが密に生えていたり、お花畑で足を踏み入れられなかったり、結構手間がかかる。下山したらもう暗くなり始めていた。

テントに戻ると、そこは普通の人には想像できない世界が広がっている。

捕獲したネズミなどは体の各部の計測を行う。全長、尾長、後ろ足の長さ、耳の長さ、体重、性別などである。その一例を表2に示した。これが終わると解剖だ。まず皮を剥がす。小型動物の場合肛門の近くから両側の後ろ足にかけて切り込みを入れ、そこからセーターを脱がすように皮を剥いでいく。剥がした皮はネズミの恰好をした台紙にかぶせ、形を整えて標本とする。これをフラットスキンというが、乾かさなくては腐ってしまうので、テントの中はまるで洗濯物を干している様子を呈する。皮を剥いだ後の体は、実験に使うため臓器を取つて凍結保存したり、組織を生かしたまま持ち帰る処理を行う。こうしていろいろ取つた残りは骨格標本にするのだが、



山頂付近でのトラッピング風景

表2. 雨飾山で捕獲した小型哺乳類の計測値  
(標高1900mでの平均)

| 種         | 計測部位<br>(単位) | 頭胴長<br>(mm) | 尾 長<br>(mm) | 後 足<br>(mm) | 耳<br>(mm) | 体 重<br>(g) |
|-----------|--------------|-------------|-------------|-------------|-----------|------------|
| アカネズミ     |              | 105         | 91          | 23          | 16        | 29         |
| ヒメネズミ     |              | 82          | 84          | 19          | 13        | 13         |
| ニイガタヤチネズミ |              | 112         | 60          | 18          | 13        | 28         |
| ヒミズ       |              | 83          | 31          | 14          | —         | 15         |
| トガリネズミ    |              | 75          | 49          | 12          | 6         | 5.5        |

注：ヒミズはこれ以外に前足の長さ、幅を計測する。耳介はない

表1. 雨飾山で捕獲した小型哺乳類

| 種<br>標高<br>(m) | ア カ | ヒ メ | ニイガタ  | トガリ | ヒミズ | 合 計 | トラップ<br>台 数 | 捕獲率<br>(%) |
|----------------|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-------------|------------|
|                | ネズミ | ネズミ | ヤチネズミ | ネズミ |     |     |             |            |
| 1,300          | 10  | 15  | 0     | 0   | 0   | 25  | 100         | 25         |
| 1,500          | 5   | 6   | 0     | 0   | 0   | 11  | 100         | 11         |
| 1,900          | 2   | 16  | 10    | 1   | 5   | 34  | 263         | 12.9       |
| 合計             | 17  | 37  | 10    | 1   | 5   | 70  | 463         | 15.1       |

現場ではできないので、新聞紙の上に広げ少し乾燥させておく。これもテントの中に広げられているのだからたまらない。といっても我々はなれたもので、これをつまみにまた一杯。

山頂部で捕獲できたのは三十四個体、アカネズミ二、ヒメネズミ十六、ニイガタヤチネズミ十、そして食虫類（モグラの仲間）のヒミズ五、トガリネズミ一である。捕獲率は約十三%となる。一般に北アルプスなど、森林限界を越える山の稜線では捕獲率が低く、五%前後とすることが多い。これは、ハイマツやお花畑だけでは、そんなに多くの個体を維持できないということであろう。雨飾山は、森林限界を越えてはいるものの、主に植生環境などが北アルプスとは異なり、ササを中心とした密な植生に覆われていて生産力が高く、住処となり得る場所も多いことだろう。

標高ごとに捕獲した小型哺乳類を表1にまとめて示した。今回捕獲できたのは五種、七十個体であるが、ここで、各種の紹介をしておこう。

アカネズミ、ヒメネズミそしてヒミズはどこにでも棲息している種であるが、棲息域が少しずつ異なっている。アカネズミは最も一般的な野ネズミで、田畑から草原、森林そして海岸近くから高山に至るまで、全国的にどこでも見かけることが出来る。これに対してヒメネズミは、外見こそアカネズミにそっくりだが、純粋な森林生活者である。

ヒミズはピロードのような毛皮をもつ小型のモグラで、やはりある程度の自然が残っていればどこにでも棲息しているが、森林を好む。

ニイガタヤチネズミは一風変わった動物だ。

分類学的にもアカネズミやヒメネズミなどのいわゆるネズミの仲間ではなく、尾の短い（表2参照）キヌゲネズミ科に属している。それだけではなく、本州の中央部、しかも亜高山帯から高山帯にかけて、場所によって多少変化はするが標高一六〇〇m以上にだけ棲息している。つまり、高い山の上にだけ鳥状に点々と分布しているのである。なぜこのような分布になったかという点、推測の域を出ないが、ニイガタヤチネズミは北方系の動物であり、ルーツはシベリアにある。そこから地球が寒冷化した氷河期に日本に渡り、温暖化で取り残されたときに、亜高山帯や高山帯に避難したということらしい。このような哺乳類は極めて少なく、ライチョウと同じような分布をしている。

トガリネズミは小型の食虫類である。食虫類といっても虫ばかりではなく、植物質のものからかなり幅広く食べているようである。何分小型で新陳代謝が活発なため、いつも食べていなくてはならないようだ。ちなみに、体内に蓄えている栄養だけでは数時間しか生きてゆけないという大食漢である。サハリンから北海道、本州、四国に分布しているが、個体数が少なく、詳しいことはほとんどわかっていない。

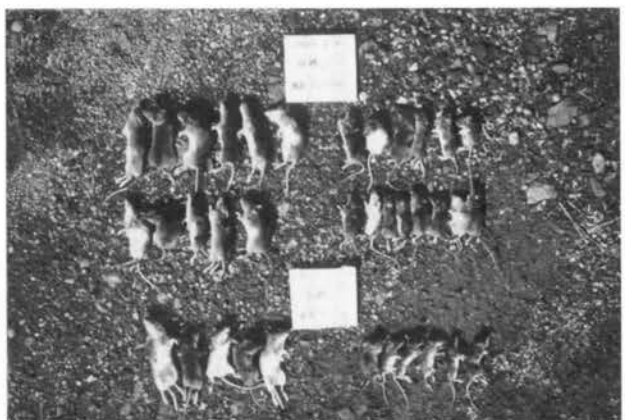
さて、小型哺乳類は生態系の基礎となる動物である。植物や、より小さい昆虫などを食べ、自らはキツネやテン、猛禽類など様々な動物に食べられる。豊かな小型哺乳類相を維持している森は豊かな森である。

また、今回ニイガタヤチネズミやトガリネズミが棲息していることを確認することが出来た。このような地道なデータの積み重ねで、といっても調査している本人達は充分に楽し

んでいるが、動物達の本来の生活や要求が徐々に明らかになっていくものと思う。

最後に、動物達にとつては迷惑な話ではあるが、このような動物達と出合うことが出来た雨飾山は、全体として非常によい印象を受けた。何より入山者がさほど多くなく、山小屋がないのがよい。かつてこの山から生活の糧を得ていた人々も、丁寧に利用していたことが何われ、本来の姿をそのまま見せてくれているようで気持ち良かった。北アルプスの山とも違い、東北の山とも違う、独特の味わいをもつ山である。

(財団法人生物学研究所 研究員)



標高1300m、1500m地点で捕獲したネズミ

## クマの棚

千葉 彬 司

ツキノワグマの分布は本州、四国、九州といわれているが、九州のクマについては一九五〇年と翌年に7頭が捕獲されたのを最後に、その後の情報は最近と聞かない。

クマは日本では唯一の大型猛獣である。たまたま天候不順で山の木の実が不作の時などは、エサを求めて人里近くに出没し、そのため撃ち殺される。

また、ミツバチの蜜が好物のため養蜂家のミツバチの巣箱を荒らし、ミツバチの巣箱をしかけた檻で捕獲されることもしばしばある。長野県内で猟期以外に捕獲されるクマの数は、年間の全捕獲数の約半数を占めている。猟期以外の捕獲は人里近くに出没したがために「有害鳥獣駆除」の名において射殺されているからである。



ミズナラに作った棚 (撮影 隆 岑村)

この「クマの棚」と呼ばれる棚は木の上に枝を折ったものが積み重なっているもので、北アルプス山麓では「クマの棚」、東北地方では「円座」などと呼ばれている。これはクマがミズナラなどの秋に実がなる木に登り、実を食べるために次々と枝を引き寄せ食べた後、その枝を折り尻の

クマは冬には冬眠をする。しかし、これはヤマネのように完全に冬眠をするのではなく、冬眠中でも刺激を与えればほとんど即座に活動を始めることができ、どちらかというと冬眠というより冬ごもりといった方がよいのではないかと思う。

クマはこの冬ごもりに備えて秋口には大量のエサを食べて、皮下脂肪をタップリとためこむ。そのため秋に実のなる木は彼らにはなくてはならないものである。

これらの実のなる木には通称「クマの棚」を見ることが出来る。クマは生活している場所に「糞」「爪あと」「かじり痕」「クマの棚」「クマはぎ」などのさまざまな痕跡を残すが、特徴的なものとしては「クマの棚」「クマはぎ」であろう。

下に敷く。その繰り返しが「クマの棚」として残る。枝の数は一〇〜二〇本位で、その厚みは三〇cm位にもなる。このようにしていったん実を食べてしまった枝を尻の下にすれば、間違っても同じ枝を引き寄せることはない。棚の下には糞がいたる所にあつて、未消化の堅果の皮が大量に含まれている。

長野県下では「棚」に利用される樹種としては、ミズナラ、コナラ、クリ、ミヤマザクラ、カキ、ブナが確認されている。中でも圧倒的に多い樹種はミズナラである。ブナ林に限られた場所であるためか少なく、北安曇郡小谷村ではブナの実を食べている報告はあるものの、棚については野沢温泉村と白馬村佐野坂スキー場上で確認されている程度である。クマの食性は木の実ばかりではなく、春先にはタケノコ(チシマザサ)、ウトブキ(ヨブスマソウ)、アザミ類など春先一番に芽を出す柔らかな植物を食べるほか、ヤマアカアザミやクロスズメバチの巣を掘り起こして食べる雑食性であるが、その大半は植物質である。一九八七年に下水内郡栄村で捕獲されたクマの胃からはカモシカの毛が検出されている。このような例は大町市の高瀬川や木曾駒ヶ岳上高地にも見られる。カモシカ以外にもトウホクノウサギの毛や骨片が含まれた糞も発見されている。これらはクマが積極的にカモシカやノウサギを襲い



ブナに作った棚 (撮影 松原 繁)

食べたものは考えがたく、雪崩などの理由により死亡したものを食べたのではないかと思う。(大町山岳博物館館長)

## 参考文献

ツキノワグマ 宮尾嶽雄 信濃毎日新聞社  
飯山市誌 飯山市  
小谷村誌 小谷村  
北安曇郡誌 北安曇教育会

山と博物館第39巻第2号  
一九九四年一月二十五日発行  
発行所 〒388長野県大町市 TEL 0261-2111  
大町市山岳博物館  
印刷所 長野県大町市俵町 大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一、二、三〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)